

百物語

泉鏡花作

全一章

大塚にや美人が居ませんなと、太田玉茗あ口を出
したがはじめりなり、原町臺の畑中に瓜の番遊ばさ
るゝ、悠悠までが矛を向け、竹早町の交番からさき
は、江戸ッ兒の部にや入らないと、何の恨か知らね
ども、頻に土地をけなし着くるは蓋し料理屋が遠い
せみで驕らぬからの崇なり。いゝさゝ、いまに蕎
麥を命じます。幸ひ涼葉も金澤から着いたなり、青
嵐の宗匠も見えて居るから、へいお待遠の聲がする
まで、一席催しはいかゞなもの、尤も紅とか、白粉
とか、乳とか、帯とか、緋縮緬とか、至極艶な處で
参りたけれど、おつしやる通り然やうなものは場所
柄にござりませぬゆゑ、夏季にばけものを讀み込み
ませうと、あるじ左次郎口を出せしは、探き巧のあ
ることにて、どなた様も美人にかけては經驗學識兼
備はり、天晴ざふらふ豪傑なれど、化物と來ては意
氣地がなし、がたりといへばぶる／＼する、わツと

いへば、あツといふ。臆病いふばかりもなき上に、
皆歸途を控へたり、五月闇となり、雨は降る。戸崎
町の玉茗には氷川田圃の難處あり青嵐の宗匠は傳通
院をぬけねばならず。なかにも原町の悠々には、く
らがり坂の要害あり。眞晝中走るにも、犬の吠える
のが恐いとて、逆手に取りの杖を放さぬほどの弱蟲
なれば、何處か、そこらのくらやみから、鬼火とま
ではゆかないでも、ぼツと螢が飛ばうなら、眼をま
はすこと請合なりと、遠き謀のありとも知らず、高
胡坐で膝を張り、いや、美人が居ないの、場並が悪
いの、初鯉を食ふまいのと、氣焰萬丈の折からとて、
しゃ！ 化競おもしろしと、うっかり乗つたるあは
れさよ。

卯の花の見る／＼美女となりにけり 悠々

そら出たぞ逃げると西瓜畠かな 九峰

それより化競はじまりて、

蒼白き病婦の顔や蚊帳の月

涼葉

小狸の鼻打當てし茄子かな

洒亭

矢叫や沖は怪しき五月閤

さかさまに天井つたふ灯取蟲

芋吉

夕顔に目鼻のあらぬ女かな

馬道を水鶏のありく夜更かな

芋之助

土橋から一人消えたる涼みかな

夕立晴れて磔柱ならびけり

など化の魂膽を錬るほどに、句数はなけれど苦作
なれば、いづれもだんまりの理に落ちて、雨の音の
み淋しき、時玉茗情き顔をして、

怪談のかへりは闇の茂かな

玉茗

そこへお氣が着かれたら、諸君もう歸らうかと、
あとじさりして遁支度、さうさた、晩くならない内
と、はや悠々も座を立つにぞ、待ちたまへ蕎麥が來
る、もう直ぐだと止めても肯かず、この大塚の妖怪
め、誰が其手をくふものか、蚯蚓は御免と歸りける。

【完】